慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	南方産動植物本邦名の研究 : 我國古文化系統側面觀
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1940
Jtitle	史学 Vol.19, No.1 (1940. 8) ,p.165- 202
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19400800-0165

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

南方産動植物本邦名の研究

——我國古文化系統側面觀——

松本信廣

(一) 序說

私共が久しい間疑問に抱いてをつたのは所謂支那文化の中北支那方面の文化でなく中部支那南部支那の文化が古代に於て如何なる樣態をとつてゐたかと云ふことである。支那文化が一つの混合體であり、その中には北方からの要素もあり、西方からの要素もあつたに相違ない。黃河の流域が支那文化發祥の地であつたにしろ、それが漸次擴大して揚子江流域に及ぶにつれ、此流域に存在してゐた土著文化との間に混和融合を生じた筈である。漢以後の支那文化なるものは大きな意味で支那南北文化の融合であり、然もその南方支那の文化なるものは所謂夷蠻の文化、支那人が古來苗猺などと呼び來つた民族の土著固有文化が底流をなしてゐたものと思ふ。かういふ文化は早く支那文化なるものに攝取抱合され、その名

の下に知られ、異種的要素は次第に滅却し、世人の記憶から忘れられてしまふ。かくして支那本土には昔から一律不變な文化が行き汎つてゐた樣に信ぜられ、支那の各地に本來存在してゐた固有要素と云ふものは、曾つて演じた役割も了解されることなく空しく忘れられてしまつたのである。

たま〳〵海島に建國した我國の樣な民族が特異の文化的傳統を把持して榮えてゐるのを見ると世人はその文化の淵源を考察するのに或はごく素朴的に日本文化の悉くが自生的なものと解さうとしたり、或はまた强いて歷史的に存在を確められ得る朝鮮や支那の古代文化の影響によりこの文化の發達を跡付け樣とする。然しながら吾人に云はしむればかくの如き方法は甚しき缺陷があるのであつて時間的に過去に遡れば我東亞の天地には今日と異なる文化的中心地が各處に存し、その文化の交流が我國文化の形成に重要なる影響を與えたことを考へにいれねばならぬのである。その文化的中心地は今日最早失はれたるものが多く、之を復原することは極めて至難な業であると云はねばならぬが然し我國文化の中に含まれてをる各種要素の中には少くともかくの如き文化中心地を豫想せざる限りその淵源を解き得ないものがある。さうした文化中心地の一つとして自分が擧げたいのは中部支那及び南支那の地帶に曾つて存在した夷蠻文化であり、恐らくはその文化的領域を固有支那文化の擴大化以前に淮水流域より山東、朝鮮、南滿方面にも及ぼしてゐたものと考へられるものである。勿論かゝる文化は今日の南支那の山地及び印度支那の北部に住む民族の間に今もなほ命脈を維持してをるとは考へられるのであるが現存文化は長期

の間に變化を蒙つたことを考へにいれねばならず、必ずしも昔の儘な姿が維持されてゐるとは考へられぬ。中南支の古代文化を考察する上に自分は考古學、民族學、民間傳承學等諸方面から考察してゆく必要があると思ふ。考古學的方法は地中の遺物を通じてその古代文化を復原する手段であり、最近金山衞、奄城、杭州古蕩、良渚鎭等の遺跡を始め、香港舶遼洲の遺跡調査が行はれ、此方面の文化が北支と異なる特殊性を有することに就て次第に知見が擴大せられてきた。また民族學的方法は中南支に殘存する原住民族の文化を考察することであり、我國の鳥居博士を初め、歐米人により手をつけられ、最近は支那學者によりモノグラフが若干公判されてをる。民間傳承の研究は主として現在の漢民族の民間傳承の間に古い文化の名殘りを檢出せんとするものであり、最近支那學者の間にも可成興味を有する人士が增加してをり、また古傳說の間にもその形式が南方などの神話系統と相聯絡するものがあることが研究されてをる。また人類の體質の研究を目指す人類學的方法は、南支の支那人をもつて北方支那人と區別し、前者は南洋人と同一部類に屬する程、混血の甚しいことを强調してをる。かういふ各種の研究方法の外に今日予の此處に採用したいのは古代方言の研究から這入る比較言語學的な方法であり、殊に曾つて此夷蠻文化の傳播を受けたと考へられる近接地帶の語彙を點檢することにより、中南支文化の往古の姿を想像してみたいと思ふ。

中南支に接近する地帶として先づ注意に上るのは日本、朝鮮、滿洲の地帶である。その中でも我國文

化は往古に於ける一個の貯水池の如きものであり、多くの源泉が之を潤してゐたに相違ないか、今日其源泉の大部分は枯渇し、又は他の大いなる流の中に包含されて消滅し去つてをる。然し我日本の古代文化に含まれたる諸要素を精細に點檢することによりかゝる失はれたる文化の小中心を再生することが出來はしないであらうか。そしてかゝる失はれたる文化の源泉を再建することによつて東亜の古代史に一道の光明が投ぜられるのではなからうかと考へられる。

一體吾日本の古代文化が朝鮮又は支那文化の直輸入であり、全部が其模倣であつたならば、少くとも我國になくして大陸にのみ存する事物の名稱に朝鮮語又は支那語が多量に輸入さるべきである。然るにさうでなく日本特有の言葉が存在する場合、吾人は我國人の特種の造語力の生んだ結果か、又は第三者が存在し、それによつて朝鮮、支那以外の語彙が輸入せられたのであるか、その何れかに決定しなければならぬ。私は今此處に若干の例を擧げて管見を述べ識者の叱正を得たいと思ふ。

（二）ト　ラ

虎と言ふ動物は我國に存在せず、歴史時代に於て我國人は朝鮮半島に於て虎に遭ひ、その凶暴に畏怖したことが萬葉集、日本書紀等に見える。故に新井白石はその「東雅」の中に「義不詳、虎もとこれ此國の獸にあらず、貂をテンといひ黑貂をフルキといひ、又水豹をアザラシといひ、羊をヒツジといふが

如き、並に海外の方言に依りしも知るべからず、」と云つてをる。また谷川士清の「和訓栞」には「とら虎をよめり、暦注に武をよむといへり、人をとるの義也、一說に楚人虎を於菟といふ、於は發聲なれば倭人も同音にいひしにや、らは多くそへていふ辭なりといへり、或は高麗の語也ともいへり」と云つてをる。人を捕へるから「とら」と云ふとは如何にもこじつけの語原說である。また高麗の語としてもその證據が擧げられてゐないのである。

現代朝鮮語に於て虎のことは H'orang hi, Tchik paume と呼び我國のトラと似てゐない。また古代形式としては前間恭作氏「雞林類事麗言攷」には pem 又は fem を虎の古語として擧げてをる。

大陸に於て從來「トラ」となぞらへられてをるのは例の楚の國の方言「於菟」である。

左傳宣公四年の條に「初若敖娶二於邳一、生二鬬伯比一、若敖卒、從二其母一畜二於邳一、淫二於邳子之女一、生二子文一焉、邳夫人使レ弃二諸夢中一、虎乳レ之、邳子田見レ之、懼而歸、夫人以告、遂使レ收レ之、楚人謂二乳穀一謂二虎於菟一、故命レ之曰二鬬穀於菟一、以二其女一妻二伯比一、實爲二令尹子文一」とある。

アメリカの支那學者として有名であつたベルトルド・ラウフェルは西夏語の「虎」を意味する語を論究して楚國の言語「於菟」に及び、その「於」が發語であると云ふ說をとり、「菟」を語根として之をチベット語系で「虎」を意味する左の諸語と比較してをる。

チベット　stag

Lepcha　sa-t'aiṅ, sa-toiṅ'
Newārī　d'ū, d'uiṅ（現在 tuiṅ）
Wālin　d'in(a)-ra
Kami　ta-ka-i（ta-ke-i）

卽ち氏は「菟」をチベット語系に於ける「虎」を意味するtを初音とする語根と類似することを認めてをる（Berthold Laufer, The Si-hia Language, *Toung pao*, Serie II. XVII, p. 53—54）。氏の意見に從へばチベット語の stag は復合語であり、本來 sa-tag, sa-d'ag より起つたものであり、その sa は Kačāri の mo-sa, ma-sa Lepcha の sa-t'an（sa-t'oiṅ）等に表はれる s を初音とする語根と相應ずるものでタイ語に於ても之と同樣 su, sü と云ふタイプが虎を指すに用ひられてをると云ふ。

シャム　süa
黑タイ　süa
シャン　sü
アホム　su, shū
カムティ　sü

從つて此「於菟」と云ふ語の比較研究から云ふと古代楚語はチベット語と近似するのであつて古代楚

人はチベット語族に近かつたと云ふことが言へるのである。

獨逸の支那學者 Eduard Erkes は *T'oung pao* vol. XXVII, p. 1—11, 1930. に掲載された「古代楚の言語」Die Sprache des alten Ch'u の中に於て之とやゝ異なつた見解を表白してをる。卽ち彼は「穀」は nou であり、支那語の乳 ju (*ńźiu) 及び奶 nai (*nāi) と起原を等しくするものであり、「於菟」は wu-t'u であり、虎を指して t'u と云ふのは共通印度支那語と緣故あるものであり、wu は恐らく支那語の母に應ずる語で「於菟」は「母虎」の意味であり支那語ならば「母虎の乳せるもの」と云ふ順序に置くべき所、之を「乳せるもの、母虎の」と云ふ位置、卽ち第二格、「母虎の」を後に位置せしめたるはタイ語の措辭法に近似し、楚の古代語がタイ語に屬すべきであり、殊に楚の古代住民の子孫と目すべき苗族の言語に近いものと見做すべきであると主張してをる。

エルクス氏の考へに吾人は直ちに贊意を表することが出來ぬ。先づ第一に「於菟」の「於」を支那語の「母」に應じたる性を示す名稱であると云ふ考へは果して妥當であらうか。越の名辭を一に「於越」と云つてをるが此「於」は春秋定公十四年「於越敗二吳于檇李一」の條に「正義曰、於越卽越也、夷言發聲謂二之於越一、從二彼俗一而名レ之也」とあるより推察すれば「越」と云ふ固有名詞に附した一種の發語の類ではなかつたかと思ふ。また前漢書貨殖傳に「辟猶下戎翟之與二干越一不中相入上矣」とあり、注に孟康曰、干越南方越名也、師古曰干發語聲也、戎蠻之語則然干越猶二句吳一耳」とある。然しこの干に對して

は之を發語と見る外に吳の名と見る注釋もあるが「於」と云ふ發語と並んで、「干」と云ふ發語の存在したことは決して不合理ではないのである。また史記吳世家には「太伯之犇二荊蠻一、自號二句吳一」と云ひ、前漢書、地理志にも「太伯初奔二荊蠻一、荊蠻歸レ之、號曰二句吳一」と云ひ、顏師古は註して「句音鉤、夷俗語之發聲也、亦猶三越爲二於越一也」と云つてをる。卽ち師古の意見に從へば吳に對しても發語として「句」と云ふ音を前に添えたと解されるのである。

此發語と云ふものが文法上如何なるものに屬するかは問題である。タイ、安南の諸語に於ては今日各名詞の種別に從ひ、その種類を表はす語を前に附するのである。例へば生物に對してはタイ語に於ては tu 安南語に於ては con 無生物に對してはタイ語に於ては ăn 安南語に於ては cái を附するのである。古代に於て中支の居住民は吳とか越の如き國名に對してもかくの如き類の發語を添える慣習があつたかも知れぬのである。その場合之を「於越」と云ひ、又は「越」と云つても大して相違が無い譯である。楚國に於て虎を「於菟」と云つたのは「於」が發語で「菟」が語根であつた見られるのであり、之を强ひて「於」が「母」を意味すると解するのは名詞に男女兩性の區分がないと物たらぬ西歐語學者の偏見ではあるまいか。「於」が單なる發語であるとすれば之を「於菟」と云つても單に「菟」と云つても差支えないし、また或場合は他の發語を添えて呼ぶ場合もある譯である。

揚子方言に「虎陳魏宋楚之間或謂二之李父一、江淮南楚之間謂二之李耳一、或謂二之於艴一」とあり、郭璞之

を注して「於音烏、今江南山夷呼虎爲艷音狗竇」と云つてをる。卽ち郭璞の時代に於ては虎を呼ぶ江南夷の語は「艷」と云ふ文字を以て記され、「狗竇」と發音されてゐたのである。此場合「狗」は發語であり、「竇」が「虎」を指す本來の語根であると見るべきでは無からうか。

ラウフエルはタイ語系に於て「虎」を意味するsを初音とする語根を認めてゐるだけであるがタイ語族の中にもtを初音とする虎を表はす語根が存在する。

劉錫蕃の「嶺表紀蠻」一四〇頁に獞語の「虎」を指す語として「古帶浪」ku-tailah と云ふ語を擧げて居る。恐らく ku は動物名の前に附せられた小辭であり、tailah が虎を意味する重復語根ではないかと思ふ。獞族は廣西省の全部、及び廣東省の肇慶、高州、廉州、連州、新會、四會、遂溪等に分布してをり、廣西省に於ては同地居住原住民族の十分の七以上を占めると云ふ。この所屬はタイ語族である。

又同書同頁に狪語の虎を意味する「兜蒙」töu mueh と云ふ語を擧げてをる。狪族は廣西省の西北部に居住する部族であり、苗と雜居してをる。此 töu mueh と云ふ名辭に於て töu は發語であるか、或ひはまたtを初音とする語根として獞語の tai と相應ぜしめるか、何れかであるが、次の mueh は左の諸語と比較すべきである。

Kačāri　　mo-sa, ma-sa

Lolo　　la-mu

Lisu　la-ma

Maru　la-maw

Lashi　la-maw

卽ちmを初音とする語根は此等の諸語では多くlを初音とする語根と合成してをるのである。左の如きオーストロネシア語系に於ける虎を指す語形は之と遠い關聯を有するものであらう。

ジャライ　ro'moṅ, lo'muṅ

チャム　rimauṅ

マレイ　harimaw, rīmav

ダヤク　harimauṅ

Kawi　rimoṅ

mを初音とする語根の異體では無いかと考へられるのはp初音の語根である。

前漢書卷一百上、敍傳の中

「班氏之先與楚同姓、令尹子文之後也、子文初生棄於曹中而虎乳之、楚人謂乳穀謂虎於檡、故名穀於檡、字子文、楚人謂虎班、其子以爲號、秦之滅楚遷晉代之間因氏焉、」とある。之によれば虎の名は「於菟」でなく「於檡」であり、「檡」の音は宅 tak である。この音はチベット語系の語根

と一層よく符合するが、此處で注意すべきは楚人が亦虎を「班」と呼んだとのことである。班の音は ip'an であるが、之に該當するものとしては古代朝鮮語の pem あり、オーストロアジア系に

Curu　　pam（虎）

あり、更に

ロ、語系の

Min-chia Lolo　pa（〃）

Méng-hua Lolo　la-pa（〃）

とも類似してをることが目を惹く。これは p を初音とする虎を指す語根の存在を示すが、恐らく m 初音の語根の一異體ではないかと考へられる。

一體印度支那南方のオーストロアジア語族に於ては「虎」を呼ぶに左の如き形式が認められる。

クメル	khlà
モン	kla kmak
バナル	kla
セダン	kla
ボルヴン	klo'a

ハラン　kliă
スエ　kalà
コンチユ　rai
カセン　kli, klà
タレン　rhok
ニアホン　khlo'
ラヴエ　khlu'
アラク　čakăra
キュオイ　kola
プルー　klo
サンタル　kūla
マレイ半島山地族　kla', kra̤'

即ち此等の言語を通じて窺はれることは「虎」を指す語根が（l＋中音）であり、母音はいろ〳〵に變化するが主としてaであり、之に前添詞として（k＋中音）が附せられ、其母音は漸次脱落して子音kだけとなり、更にkが有氣音化してkhとなり、時には消滅してしまふ。そして語根の初音lはrと變

化する場合もあることである。

ラウフエルは西夏語で虎を lo 勒と云ふのをロ、語系の左の諸語と比較し、

Ahi Lolo　lo
Nyi Lolo　la
Lolo-p'o　lo-mo
Lisu　la-ma
Mo-so　la
Manyak　lêphê

此系統の言語は結局ごく攸久の古へにモン・クメル語の l を初音とする語根から分れたのだらうと推測してをる。

その外支那語では虎のことを χou (xo) と呼んでをるが、これは次の語形と關係あると考へられ、k を初子音とする語根の存在が推定される。

チベット・ビルマ語系

Lušai　sa-kei
Meitei　kei

Burmese　kyā
Khyang　Kyí
Kámi　ta-kái
Gyárung,　kong
Thochú,　khoḥ

タイ語系

Sgan-Karen　ka, hkhe
Pwo-Karen　khay
Laos　sûa không

即ち虎を表はす語根にt、s、l、m（或はp）、kを各初音とする約五の語根があり、その中互ひに復合しあふ例があるとすれば、獞語に於けるku-tailahはtai及びlahの各獨立する語根の復合したものであり、ku-tailahは一にkutaiでもよい譯である。さうすると郭璞の引用した「狗竇」と云ふ江南山夷の言語と甚だ類似する譯である。たゞ此場合自分はkuを發語と推定したが或ひはkを初音とする「虎」の語根から來たとも推定される。然し句吳の場合に於ける「句」、「狗竇」に於ける「狗」と云ふ發語の例、オーストロアジア語に於ける前添詞（プレフィクス）、k＋中音の存在、安南語に於て種別冠詞と云はれる

con, cāi の例などから見るとku-tailah のkuは發語として解釋する方が妥當である樣に思はれる。兎に角予は「虎」を指す江南の語彙中に我國の「トラ」と類似した左の三種があり、

楚　於菟　wu t'u

江南山夷　狗竇　ku tō

獞　古帶浪　ku tailah

そしてトラはその中最も獞語ク・タイラに接近して居ると信ずるものである。更に進んで此語根はチベット語系に見出だされるばかりでなく、弘くオーストロアジア、ロヽ等の語群の語根とも比較することが出來るのである。

我國人がもし韓人や支那人によつて虎なるものを知惹したとすれば虎を指す名辭は朝鮮語であり、漢語であつた筈である。然るにトラなる語に最も似たる名辭が朝鮮語でも無く漢語でも無く中支より南支に散布するタイ語系原住民の名辭及びチベット、オーストロアジア語系の名辭に近似してをるとすれば古代日本人が接觸した大陸文化、またその文化の形成者が何者であつたかを判定する一つの示唆となるのでは無からうか。

(二) キ　サ

象は我國に於て洪積期には居住したらしいが今日に於ては全く絶滅してをる。どうして此動物をキサと呼んだかは今日全く不明となつてをる。白石が東雅に「象は西南夷の獸也、古の時此國に來れりとも聞えず。然るを呼びてキサと云ひしは、其牙によりて、竟に獸の名の如くなりしと見えたり。倭名鈔に、木部に唐韻を引て樗は木文也、漢語抄にキサといふ。或說にキサは蚶之和名也、此木文、與二蚶貝文一相似、故取レ名と註せり。さらば古には、凡そ物の文あるものを呼びてキサと云ひけるなり、象の如きも亦其牙の文あるに因りて此名あるなり」と云つてをるのは我國學者の通說を代表するものと見てよいであらう。

象は朝鮮語では k'okkini であり、キサと似てゐない。

支那語に於ては 'ziàn であるがタイ語系に於ては次の如き形式をとつてをる。

シアム	j'āin
ラオス	j'āin, sāin
シャン	sāin
黑タイ	j'āin
ヌン	sāin
ディオイ	chaiñ

Ahom　　tyain

Sgau-Karen　　k'saw, kah-tsau

Pwo-Karen　　k'sang

Toungh-thu　　hsan

オーストロアジア語に於ても之と類似してをる。

コンテゥ・スエ　tien

モン　　chin (chon)

Mi　　sain

Khmus　　sechain

Nanhang　　achain

Lemet　　Kesain

ビルマ語系に於て類似せる形は左の型式である。

Burma　　tshein, ch'ain

即ち是等の諸語に於て語根はt又はc又はs・jによつて始まつてをるが何れもその本源は一に歸することは明白である。即ちかゝる同種の初音を有する語根が存在し、それに或場合sg又はk+中部又

は a の前添詞（プレフイクス）が附加せられてをるのである。此場合 k+中音 は虎の場合と同じく生物の名詞の前に附加される前添詞と解釋することが出來よう。

即ち我國のキサはその後尾のサと云ふ語根がタイ、オーストロアジア語系に於ける「象」を指す共通語根の終音の無い形と類似し、前部のキと云ふ發語はその k+中音 の前添詞に應ずるものと見ることが出來るのである。我國のキサと云ふ名辭が象に對する印度支那語彙と關係あるとすれば最も日本と接近した漢語、タイ語系統の大部分と單に語根のみを共通とし、却つて Lemet の如く南方印度支那、メーコンとサルウヰン間の山地の原住民とかカレンの如きビルマ居住部族の語の前添詞を含む語形と近似すると云ふ奇妙な結果を呈するのである。之は如何なる理由によるものであらうか。前述の如く揚子江下流々域に關した吳の國名には「句」といふ發語が添えられ「句吳」と呼ばれてゐた。また郭璞の時代に於て江南山夷は虎を呼んで「狗竇」と云ひ、自分の考へでは「狗」は發語であつたのでは無いかと思ふ。安南人は象のことを con voi と呼んでをるがその con は生物名に附せられる種別冠詞である。また今日オーストロアジア語族に於ては生物の前に前添詞 k+中音 を附する習慣がある。此種の習俗は曾つて江南土著民の間にも存在し、キサと近似した Ki-sai の如き形式の象を指す名稱が存在し、それが我國に輸入せられたのでは無からうか。

史記司馬相如雲夢の賦に於て正義に「象大獸長鼻牙長一丈俗呼爲二江猨一」とある。「江猨」は kang

jiwn なるべくカンを前添詞か種別冠詞の類の小辭、ジャンを象を指す印度支那共通語根と見ることが出來るのではなからうか。卽ち唐の司馬貞の頃にも中部支那では俗語として同じくk初音の前添小辭を附する象の名稱を使用してゐたのである。

以上は予の單なる推定であるが今一つ考へられることは我國と印度支那との間に直接か間接かの聯絡があり、印度支那オーストロアジア語のkesan が直接我國のキサを生んだのでは無いかと云ふことである。此考を助けるのは日本紀欽明紀四年四月の條に百濟聖明王が使を遣して扶南の財物と二口とを獻らしめたと云ふ記事である。當時百濟は江南の諸王朝と密接な交易關係にあつた。そして此等の江南の諸王朝はまた印度支那の諸邦と親善關係にあつたのである。してみると扶南卽ちカンボチアの如き國の特產物である象牙は他の南方の珍奇なる貨物と共に南朝の宮廷に輸入され、次いで之が百濟の朝廷に渡り、百濟の仲介で大和朝廷に到來したことが考へられるのである。さうした場合象牙の如き貨物が、原產地の名を負はされて我國まで傳はつたことが思惟されるのである。然しそれはさうとしても百濟の船舶は直接印度支那まで出かけた譯でも無いであらうから江南の地を經て南方の物資は各國に散つたのであり、其際江南に於ける言語が隨伴して、我國に傳はつたことはあながち否定することは出來ぬ。

一體「象」は今日の學說によれば殷周時代には支那北部にも棲息したと信ぜられ、春秋戰國時代には楚の國卽ち長江流域になほ存したる證左あり、五世紀より十世紀に至る間は湖南の南より嶺南地方にな

ほ棲み、時には江淮地方にも出現し、清初になほ兩廣地方に產したと云ふ（徐中舒、「殷人服象及象之南遷」、集刊第二本第一分、藤田豐八、「象」「東西交涉史の研究南海篇」所收）。從つて我國人が象を知つたのは必ずしも印度支那を經由せずともし長江下流々域と史前より通交してゐたとすれば其方面から象に對する知識を輸入することが充分出來得たと思ふ。

支那に對する日本の古名は「モロコシ」であり、その起原は「諸越」を日本流に訓じたからであると云はれてをる。これはまだ證明せられぬことであるが、恐らく漢人の勢力が長江及び嶺南地方に浸透する以前から此地方に榮えた土著民族が海上に於て、我國などと接觸してゐたことは充分想像出來る。ビルマ方面に產する硬玉が我國の石器時代、古墳時代に多く發見せられることから云つても當時海島と大陸を直接間接につなぐ一つの通商路が中支、南支方面に存在したことを推定してもよいのではなからうか。(註1)

かう考へてくると和名キサが曾つて支那南方の原住民の間に行はれてゐた「象」に對する古名の名殘りと考へてもあまりに奇矯な說ではなからうと信ずる。

江南の先住民が動物名に前添小辭kを附着せしめた今一つの例を擧ぐると吳の方言に狗を呼ぶ語として次の語が存する。

嚘嚘吳人呼狗方言也（廣韻十遇）

嚘の古音は ŋiu̯ であり、「嚘嚘」はそれを重ねたものであらう。之に似た語は苗族の間に存在する。卽

ち鳥居博士は其「苗族調査報告」に貴州安順花苗の犬を指す語として

lē

また安順府志に見ゆる苗語の狗名として

拉　　la

を掲げてをる。その他デーヴィスは苗語として[註七]

klie

を擧げてをる。その他左の類語が存在する。

猺　　klö, kro, gro

Mon　　kle, klur

即ち犬を指す名稱としてlが初音の語根が存在し、それにkと云ふ前添詞の附着する形式が存在するのである。そしてその形式は苗、猺、モンの諸言語に共通なのである。苗猺の言語が如何なる言語系統であるかは未だ確定してゐないがオーストロアジア語族と同じk前添詞の之に見受けられることは注目に價する。かういふkを初音とする前添詞を動物名の前に附する習慣が曾つて中南支居住の原住民の間に行はれてをり、日本の「象」を指す語彙はさういふ江南の古代先住民の影響によるものであると見ることは出來ないであらうか。[註八]

（三）イネ、シネ、ウル

既に此語に就ては拙著"Le Japonais et les langues austroasiatique,, p. 60中に於て敍及し、また先年第三回東京人類學會及び日本民族學會聯合大會に於て私見を述べ、その「大會記事」中にも發表しておいた。此處には少し訂正を加へて再述してみたい。カールグレン氏はその"Philology and ancient China", Oslo, 1926 p. 120の中に我國のイネは古事記にはシネと使用せられてをるから、イネは恐らくシネの簡約化されたものであらうと云ひ、シネを稻の一種である秈（古代支那音 siän 北京語 sien）から來たものであらうと論斷してをる。また松村任三博士も之より先同じ意見を表白されてをる（溯源語彙、一九五頁、大正十年）。自分は先に秈は宋代に占城國より種子の輸入せられ支那國内に擴つたものであり、此語を以て我國語の源流となすのは臆斷であると論じたことがある（「東京人類學會日本民族學會聯合大會第三回記事」、所收「稻に關する東南亞細亞語彙」七五頁）。然し之は自分の間違ひであり、最近占城米の宋代支那輸入の事情に就て重要なる論文を公けにされた加藤繁博士は此語がそれ以前から支那に存することを敎示された。そこで調べて見ると成程唐の玄應の一切經音義四に「江南呼〻粳爲〻籼」とあり、また唐の慧林の一切經音義四十八に「江南粳爲〻秈、秈音仙方言也」とある。してみると秈と言ふ名辭は江南地方に於て唐の頃粳を指す方言であつたのである。辭源「粳」の條に依ると「米之不〻黏者、早熟曰〻秈、晩熟曰粳、本作〻秔」とある。又今本玉篇には「秈息延切秔稻也」と見え、魏の

張揖撰、隋の曹憲音の廣雅には「秔仙稉也」とある。但し玉篇原本には秔字はなかつた様である。

漢語の「粳」'kang' に概當すると思はれる語根はタイ語系、ロロ語系、苗語、オーストロアジア語系に左の如く存してをる。

シアム	k'ao
シャン、アホム	k'au
白タイ	k'ou
ラオス	k'au, k'an
安南	gạo
La	kao
Khmer	aṅ-ka
Palaung	la-kou
Wa	n-gou
K'a-mu	un-k'o
P'u-man	n-k'u
Sué	ran'-kao

khasi　khāu
Chong　ru-ko
Samrê, Por　ro-k'o
Cuoi　aṅ-kau
マレイ山地民　hē-kâ'
黎人　ka, kœi
Leṅ-ki Miao　kia
Mo-so　k'ia
Meng-huo Lolo　sa-k'ao
La-hu　sa-k'a
Si-hia　k'o

然らば江南の「粳」の別名「秈」の方は如何なる語根に連絡するかといふに、ビルマ、ロ、モン・クメル語系に左の類例を認めることが出來る。

Asi　shin
Acch'ang　t'sen

Maru　chin

Lashi　chen

P'ön　se-si

Burmese　s'an

Mêng-hua Lolo　chi-se (Paddy)

Lisu　chö (Paddy)

Lahu　sa-si (Paddy), sa-k'a (husked rice)

Kontu　sŏ (赤米)

Tareng　ko-sò (赤米)

此等の例から見るとsを初音としnを終音とする語根の存在を推定することが出來、支那の「秈」は之と聯絡すると見ることが出來る。然し問題は我國のシネが果して此の系統と結ぶことが出來るかどうかといふことである。邦語に於て稲を指す主要語にイネあり、又類語にヨネあり、イネのイは發語でその語根はネであるといふ見方が存する。例へば新井白石は東雅に「古語にイといひし發語の詞なるあり、出るの義あり、ネを言ひしは猶種といふが如し、その嘉種なる事を言ひしに似たり、またシネといひしもイネ也、イといひ、シといふは卽ち轉語なり」といひ、また「稲をイネといひ、米をヨネといふが如

きも轉語なり、又根をネといひ、苗をナへといふも轉語也、ネといふ言葉を開呼ぶときはナへなり」と言つてをる。

nを初音とする語根を大陸に求めると

安南	nếp
チャム	nĩóp
クメル	sróv dạm-nò'p
セダン	ñiạn
バナル	bā nān
ボロヴン	op noń

即ちオーストロアジア語系のモン・クメル分派に於てはnを初音とし、P又はnを終音とする稻を指す語根が存在してをるのである。(註3) 此の言語樣式は更に北方のタイ語系にも見出だされ、

ラオス	khau niu
シアム	khă'o niáu

また廣西省の猺の間に於ても見出される。

紅頭猺　u-nung（小米）

長髪猺　　ge-nu（小米）

卽ち大體nを初音とする語根がオーストロアジア語を中心として東南アジアに擴つてをることは明白である。此名で呼ばれた稻は「粳」と反對に主として riz glutineux「粘りある稻—糯米」を指してをるのである。

支那に於て稻を指す普通語「稻」はその詩經時代の古代音はカールグレンに從へば d'og である。また說文に「稻」を「稌」と訓じ、爾雅釋草に「稌稻」とある。此の「稌」は餘聲であり、徒古の切で d̪iwo である。また說文に「沛國謂稻曰稌」とある。稌の聲は耎聲で奴亂十四部今語奴臥切とあれば古くは n̪iwän である。また穀梁傳襄公五年の條には仲孫蔑衞孫林父會吳於善稻、吳謂善伊、謂稻緩となり、段氏之を引いて註し、「謂稻爲緩者、卽沛國謂稻曰稌之理也、緩古亦讀如暖」と言つてをる。暖の音は 'nuân であり、稌と殆ど同聲である。沛の地方は安徽、江蘇の北部であり、吳はその南部である。卽ち今の中支方面にn初音の語根が曾つて存在してゐた譯である。dとnとは相通じ、稻や稌も之と同一系統のものと考へ得るが兎に角中支方面に行はれた名稱はd初音でなく、n初音の語根であり、東南アジア語彙と聯絡し、合せて日本のイネとも聯絡してをることは注意すべきである。(註4)

予の東京人類學會日本民族學會第三回聯合大會に於て此の小論を試みた際、小倉進平博士は朝鮮語に於て i-pap（米飯）、i-pi（稻からの箒）、i-sak（穗）などいふ語があり、これらのiは語原的に ni（語頭

の n- は昔から普通に脱落す）であつたと考へると教示せられた。もしこの ni- がオーストロアジア語 nep 系の語根と類似するとすれば曾つて太平洋周縁に印度支那、南支那、朝鮮一帶をつなぐ稻を示す同一形式があり、我民族の祖先は、此の流れからその主要食料と其名稱を採用したのではないかと考へられるのである。吳國で善稻を意味するイヌアン（伊緩）と云ふ語は我國のイネとあまりによく似てをる。

我國の稻名で從來外國名と關係づけられてゐたのはウルチといふ名稱である。古くから學者は之をサンスクリットの vrīhi と比較してゐたのである。然し此の比較は甚だその傳來の系路その他に就ての考證がされず、その中間地帶に於ける類似型に就ても充分な研究が行屆いてゐない樣である。ウルチの古い形はウルであらう。倭名類聚抄卷九に秔米を宇流之禰（ウルシネ）を訓じてゐる。

從來の我國の學者は此のウル又は後の形式のウルチが印度の vrīhi に起原を發したとするのである。例へば最近濱田秀男氏は此の語が西は英語の rice, ギリシャ語の ὄρυζα アラビア語の uruzz 等となり、西は馬來語の bras, パラウ語の palas, 我國語の uru-shine になつたのだとする。然し此の問題に就ては既に佛のジュール・ブロック氏の有力なる論文表はれ、少くともヨーロッパ語系、セム語系に於ける稻の名稱の起原たるギリシャ語 ὄρυζα は古代北方イラン語 *wrinjhi より出でサンスクリットの vrīhi から來たものでなく、ドラヴィダ語の ariçi から來たものでもないことを明確に說破してをる（Jules Bloch, Le nom du riz, Etudes Asiatiques, Tome I）. 自分はブロック氏の說を正しとするものであり、恐らくギ

リシア人は北方ペルシアより稻と其名とを初めて輸入したものであらう。

然らばインドより東方へは如何といふに、我國のウルがサンスクリット vrihi から來たとするにはその中間地帶に位する地方に如何なる類似型が存在してゐるであらうか。オーストロネシア語系に於ける左の名稱とウルとの間の聯絡は餘りにかけ離れてゐるのである。

マレイ	beràs, bràs
Javanais	beras
Batak	boras
Makassar	bérasa
Tagal	bigas
Bisaya	bogas
臺灣諸語	vurrus, bras, brati

ウルのウは發語であつて語根がルであるといふことは考へられないであらうか。我國語に於ては流動音は初音たるを避け、その種の外來語を採用する時、必ずその前に母音を添へなければ承知しなかつたのである。若し稻の名が外國より輸入せられ、その初音が流動音であつたとすれば母音が發語として添へられたことを推定なし得るのである。ウルの原語としてルといふ形式を想定する時吾人は對岸の支那

に於て自生稻のことを穭、稻、旅などと呼んでゐたことを忘れてはならないと思ふ。その外、東南アジア語中に左の如き類似語が見出だされる。

マレイ半島山地民　ja-roi
モン　srõ
クメル　srâuv
（安南語　lūa（穭））

此のrを以て初音とする稻に對する語根は南方語の中にもk初音の語根と相重つて表はれて來るのである。例へばオーストロアジア語系の中に rain-kao (Sué), ru-ko (Chong), ro-k'o (Samré, Por), la-kou (Palaung) といふ型で存在してをる。我國語にもし此の語形が入つたとすれば流動音の前に母音を附して oro-kao oro-ko の形となしたのであらう。我國で自生稻のことをオロカオヒと言つたのは遇然の一致にしては餘りによく類似してをる。卽ち和名類聚抄に穭を「於路加於比俗云ニ比豆知ニ」と訓じ、狩谷掖齊はオロカオヒを「希疏生」の義なりとしてをる。また「穭」といふ文字は音「呂」であるが、古くは自生稻は「旅」と呼んでゐたのであり、此の「旅」の詩經時代の古音はカールグレンに依ると lio であるし、易林には喉音の終音を伴ふ音と韻を同じうし、liog いふ形に再建されるのである。我國のオロカオヒとは此の種の言語と關係を有し、オロカといふ樣な形であり、後に民間語原說が之を「マバラに生

フルモノ」として見るに及んでオロカオヒといふ名に轉じたのではないかと考へられる。若し此の假說が許されるならば流動音を初音とする語根の稻の名稱は、我國に於ては遠く印度の vrīhi に緣故を求めるよりも先づ手近の支那の穗又は旅(lǐog)、オーストロアジア語の ro-kó, ran-kao の類と比較すべきである。說文にも「秜」を擧げ、「稻今年落來年自生、謂之秜」と言つてをるが、その聲は里之切であり、淮南子に「離」と呼ばれてゐるものと同じだらうと段氏は述べてをる。

マレイ語に於て今一つ稻を指す語に pādi がある。その類似形としてファブルの馬佛字書には

Javanais	pari
Sundanais	paré
Batak	pagé
Makassar	paré
Dayak	parey
Tagal	palasi
Bisaya	palai

が擧げられてをる。濱田氏の比較したパラウの palas もマレイの Beras より寧ろ直接には Tagal 語の palasi に連絡すべきである。勿論ファブルの引用する Pijnappel の意見に依れば此語群も vrīhi より來

たといふからその意味から言へば遠い聯絡があるが、マレイの berás とは暫く離して考ふべきである。マレイに於て今一つねばりある稻を呼ぶ pulut といふ語がある。此の語も從來我國のウルチに比較されてをる。然しウルチの古形なるウルと pulut とは少しく距離があり過ぎる。

要するに濱田氏がその論文中に考證された如くサンスクリットの vrihi が berás になり、また palas になり、我國のウルシネになつたといふ樣に都合よく聯絡はつかぬ樣である。pulut といふマレイ語を比較すべきは寧ろ我國に於て自生稻を指した「比豆知」といふ語であらう。然し之も中間の流動音 l が齒音に代つたことを前程にしなければならぬ。

稻は植物學的に二種の區別のあることは最近我國の學者の研究に依り明かにされた。卽ち血精學的研究と雜種に依る稻品種間の親和度に依り世界の稻品種は日本型と印度型とに二大別され、更にまた明暗兩所に於ける稻芽生器官の生長形式に依る比較研究に依つても此の二形式の存在は確證せられた。日本型は日本內地、朝鮮及び北支に多く分布し、印度型は臺灣、南支、瓜哇、印度、錫蘭地方にまで分布し、中支、布哇、及び北米に兩者が混在してをるといふ。また日本型は水稻に多く、印度型は陸稻に多く、實驗上マコモ及び野生稻に近似した生長曲線を有するものは印度陸稻に發現し、それより印度型水稻、日本型稻、最後に日本型水稻の順に野生稻との差が大となつてをる事が確められ、所謂陸稻は水稻の原型であることが確められたといふ。更にまた福岡、鹿兒島、奄美大島、琉球及び濟州島に二、三種宛印

原型の発生生長形式を示す稲あり。是等は現在南方日本と南方或に南洋との連絡のあつた證據を提供するのではあるまいかと考へられる。即ち日本陸稲は一部印度型で形成されてゐても他の大部分は日本型であり、又日本内地産水稲の大部分も日本型である。從つて此等の稲の故郷は同じ日本型の多い北支、中支、また北支より品種の由來したと考へられる朝鮮に求むべきであつて、我國南邊の稲は南洋のものと關聯を求め得るも稲の最も重要な渡來經路は大陸の東北方、即ち北支と朝鮮半島であると言ふ。

大體以上が最近濱田秀男氏がその「イネの由來並びに分布に就て」（農業及園藝十卷七、八號昭和十年）中に述べられた渡來經路に關する結論の大要であるが、更に近時主として考古學上から農業の起源を究めた農業史家の小野武夫氏はその「國家起源と農業史」（社會經濟史學九卷十一、十二號、昭和十五年）中に於て我國彌生式土器文化が北支に源流を持ち、南支、印度支那の新石器時代は直接我國新石器時代と關係なく、我國の彌生式土器文化と不可分の關係にある米作は北支那文化と共に東漸して日本に渡り來つたものと考へられると結論し、上述の植物學的論據を有力なその傍證とされてをる。然し乍ら此の議論は未だ必ずしも最後のものとは言ひ得ぬのである。濱田氏も我國に渡來した最初の稲が南方のであることを認められてをる。支那に於ても中支には印度型の稲が存在してをるのである。此等の原始型稲が氣候の寒冷の所に於て改良を加へられ、また自然に適應して漸次日本型になつたことが考へられるべきではなからうか。

即ちかゝる優良種稲は、北支に於て生み出されたと共に日本本土自體に於ても生み出されたのではな

からうか。然らばかゝる所謂「日本型」は必ずしも全部が全部北東アジアから輸入されたと考へずともよい譯である。吾人は江南地方に殊に盛んであつた稻の栽培が太平洋沿岸を通じて北東アジアに遡り、山東、南滿、朝鮮に及び、また日本にまで及んだことを假定するのであつて、假令日本の稻の優良種が朝鮮半島を通じて入つて來たとしてもそれは我國の農業の北支起原を論斷するには足りぬと思ふ。また考古學的に言つても我國彌生式の起原を果して北支に求め得べきかどうかは輕々に論じ得べきことではない。支那の中支、南支方面は未だ研究が殆ど行屆いて居らず、又僅かに知られた材料を通じて見ても石庖丁の如きは杭州地方にもあり、またその原始型の如きものはもつと南方からも出てゐる。考古學的に言つても小野氏の如く日本の彌生式文化が北支那に發生したと結論するのは未だ時期尚早であつて、例へば土器の相違の如きは有力なる反證であると言はねばならぬ。此の問題は將來なほ一層の研究を要すべきものであり、學徒の輕々に論斷するを許さぬものである。

北支に於ける稻作が極めて古代に遡ることは既に仰韶發見の土器底から出た籾殼から證明されてをる。(註5) また古代から稻作が北支に行はれてゐたことに就ても岡崎文夫氏の「支那古代の稻米稻作考」（小川博士還曆紀念「史學地理學論叢」）が多くの文獻的徵證を擧げられてをる。然し支那の如き文化の發達した國土に於ては如何なる僻地に於ても稻の耕作は分布してゐたに違ひない。また氣候の變遷もあり、今日稻の耕作に不便なる北支が曾つて稻の栽培に適する氣候であつたとも考へられる。然しそれだからと言つて歷史時代初期

[illegible]

獻者であつたとは到底考へられぬのである。(註6)

從來我國論者は朝鮮語の稻を指す pe を我國のホ(穗)と比較してをる。(註7) 然しオーストロアジア語にも之に似た語形は存してをる。

Phnong, Prou	phē
Sedang	phei
Halang	pē, peh
Alak	pāhei
Bahnar	phe, phä
Kaseng	pai dik
Churu	phè
Chrau	phe
Proons	pe
マレイ山地民	bē, bēh

なほ說文には秠を擧げ「稻屬、从禾毛聲、伊尹曰飯之美者元山之禾、南海之秠」とある。この「秠

mâu」はオーストロアジア語系の左の諸語と類似してをる。

Halang	mao
Sedang	bau, mau
Sué	buh
Kaseng	mba
Stieng, Bahnar, Alak	ba
マレイ山地民	ba'-ba'

又苗族に mao (cooked rice)がある。

此の系統の名稱も pe と同一系統のものではなからうか。從つて pe と穂との比較に依つても簡單に朝鮮からのみ日本に稻が入つたと論斷することは出來ぬ。要するにnを初音とする稻を指す語根が朝鮮を含めて東南アジアに分布する所から推しても日本のイネの言語系統は北東アジアよりも寧ろ海岸線を傳はつて南方支那、印度支那方面に之を求めたいのである。

稻に關する諸名稱に就て未だ述ぶべき點が多いが、また後の機會に讓り、之を要するに稻の名稱の研究を通じて我國古文化が江南地方と密接な關聯のあることは推定することが出來る。また支那文化なるものも江南地方に於ては南方の影響の色濃いことが認められるのである。

トラ、キサの二名と同樣イネ、ウル等の名辭は江南に曾つて存した南方文化要素にその淵源が歸せられるのではなからうか。

日本文化に及ぼした大陸要素の渡來方向に就ては從來種々論議せられてをるが、吾人は其一方向として江南方面を看却してはならぬことを此處に强調するものである。

附記、なほ本論文の續篇は他の機會、他の場所に發表を期する。なほ本論文起草に當り稻に就て東大農學部助教授東條健二氏より多大の敎示を受け、資料の借用を得たことを厚く感謝する。

註一、最近日本發見硬玉の原產地を日本內地に求めんとする企圖がある。然し其理由が「單にもし支那から來たとすれば支那式玉製品を伴ふべきだ」と云ふだけに過ぎぬとすれば中支及び南支に北支那文化の傳來した以前に硬玉が日本に渡來し得たことを考慮にいれねばならぬ。

二、H. R. Davies, Yün-nan, the link between India and the Yangtze, Cambridge, 1909, 附錄

三、このnは時にdと變化する。例、チャム語 ḍiờp, ḍiap.

四、濱田秀男氏は此「稻」を印度の現代語で稻の或品種を呼ぶ Dhan と比較してをられるが、之も少しかけ離れたものを結びつけ、間に連絡のない嫌ひがある。また Telinga 語に野生稻を Newaree と云ひ、Roxburgh は之が稻の原種だと云つてをるとのことであるが(Hobson-Jobson by Yule and Barnell), この Newaree を或人の樣に邦語のネバルなどに比較するのも今の所少しかけ離れ過ぎる。

五、G. Edman and E. Söderberg, Auffindung von Reis in einer Tonscherte aus einer etwa fünftausend-jährigen chinesischen Siedlung, Bull of ohe Geol. Soc. of China, vol. VIII, No. 4, 1929.

六、稲及び耕作に關する邦語と南方語との關係に就ては拙著「Le Japonais et les langues austroasiatiques」參照、なほコメと云ふ語に就ては之をマコモから來たとする西村眞次氏の說「日本稲作の人類學的研究」(文學思想研究八)一九二八、がある

が自分はコメをやはり、安南語の co'm 等と關係ありと見たい。

七、金澤庄三郎博士「日韓兩國語同系論」一九一〇、九頁、

八、キサを印度支那語と結びつけたのは坪井九馬三博士が最初である「我が國民國語の曙、」一九二七、四〇頁、